知的障害者を対象にした造形と音楽のコラボレーションによる表現ワークショップ

―「からだでつくろう!!からだでうたおう!!」を事例にして―

茂木一司 ・ 吉田秀文 ・ 金澤貴之 ・ 手塚千尋 ・ 井上昌樹 ・ 鷺坂裕子

群馬大学教育実践研究　別刷
第 26 号　231～241 頁　2009

群馬大学教育学部　附属教育臨床総合センター

知的障害者を対象にした造形と音楽のコラボレーションによる表現ワークショップ

―「からだでつくろう!!からだでうたおう!!」を事例にして―

茂木一司[1)]・吉田秀文[2)]・金澤貴之[3)]
手塚千尋[4)]・井上昌樹[4)]・鷺坂裕子[5)]

1）群馬大学教育学部美術教育講座　・　2）同音楽教育講座
3）同障害児教育講座　・　4）同大学院教育学研究科
5）同大学院研究生

（2008 年 10 月 31 日受理）

1.はじめに

美術／音楽／体育（造形・音楽リズム・運動）の協同による知的障害者（児）を対象にした群馬大学公開講座の開催は、今年度で 3 回目である。障害児教育講座の金澤（以下、敬称略）の呼びかけで、1 年目（2006）は「心と体の運動教室」（山西）という名称で体育単独で、昨年（2007）より美術（茂木）と音楽（吉田）が加わり、心と体の造形表現教室「からだでえがこう!!大きな絵!!からだでつくろう!!つながるかたち!!」（2007 年 10 月 14 日（日））と題した体育と美術の協同＋音楽単独で、そして今年度（2008）は体育単独＋「からだでつくろう!!からだでうたおう!!」（2008 年 10 月 12 日（日））と題した美術と音楽の協同で実施した。

本研究は、専門のるつぼである教育学部において、実際に（さまざまな理由でなかなか起こりない）異領域の協同（コラボレーション）がどのように実践され、どのような結果が生じたかを、ドキュメンテーション（記録）するとともに、メリットやデメリットを検討するものである。

2．本公開講座の動機・目的

「学校卒業後学ぶ機会の少なくなった知的障害をもつ方等に、楽しく学んでいただきたいと思います。心と身体を開放し、楽しく運動することを知り、日常生活に活かせるような内容にしたいと思います。」

講座の概要に示されるように、障害を持つ人はいったん社会に出てしまうととたんに人や社会との接触が少なくなってしまう。私たちは障害の有無にかかわらず平等に教育を受ける権利（日本国憲法第 26 条）を持っていて，少なくとも義務教育において，そして実質的には後期中等教育においてもほぼ保証されているといえる。しかしながら，高等教育機関の進学についてはどうだろうか。特に知的障害者については，特別支援学校卒業後の学びの場が非常に少なく，わが国の行政においては、学校教育終了後の障害児の教育・学習活動に対する支援の施策は皆無に等しい状態である（國本ら，2002）[1)]。知的障害児余暇活動研究会(2004)が全国の知的障害者 742 人からの余暇活動のアンケート調査を行ったところ，知的障害者は余暇生活において活動内容を制約される傾向にあり，特に義務教育卒業後の生活は生涯学習が難しいと報告している。さらに丸山(2004)は、知的障害者の「自主的な学習・文化活動を含む活動」における社会的支援は貧困であり、そのことも影響して余暇生活が生活領域として十分に確立されていないという問題を指摘している[2)]。

このような現状を受け，近年，知的障害のある人たちにも大学での学習の機会を保障しようという動きが徐々にだが全国的に広まってきている。しかしながら，群馬県では知的障害者を対象とした公開講座は報告されておらず, 2006 年度に我々のグループで始めた取り組みが新たな試みであった。当初は体育領域（山西）の実践のみでスタートし，その後 2007 年から，美術

領域（茂木）と音楽領域（吉田）を加えた３領域に拡充・改善を重ねて，今年度の３年目の実施に至っている。

このように，群馬大学公開講座は高等教育機関における知的障害者の学びの実践の継続性のある試行的な実践の場であり，実態を報告・分析することで知的障害のある人のより良い生涯学習の保障につながると考えられる。

本公開講座においては、群馬大学公開講座の実態を報告・分析し、知的障害のある人の生涯学習のより良い在り方を検討することを目的とした。

今年度の「からだでつくろう!!からだでうたおう!!」のワークショップの目標は、「身体全体を使ってリズム遊び（表現）を楽しむ」つまり、「身体の楽器化と音楽によるパフォーマンス表現」というものである。私たちは、当初創作楽器をつくって演奏してみようかと考えたが、制作能力や時間的な制約もあり、楽器はあらかじめ支援学生が制作し、参加者はリズムとパフォーマンスづくりに専念してもらうことにした。吉田の指導の下、支援学生たちにリズム遊びの体験を実施し、どのような学習環境のデザインがいいかを検討した。茂木、吉田、手塚、井上の４名で、体に付けて踊りながら鳴らす楽器（マジックテープに鈴を付けた楽器、ペットボトルやガチャガチャのケースにビーズや豆類を入れたもの）、立木につるしてたたいて鳴らすオブジェ、同じく打楽器のペイントした図書館の排気口などを考え、ボランティアの学生に制作してもらった。場のデザインは、アートと音楽のコラボレーションを強調したインスタレーション的な学習環境を考え、参加者の気分が乗りやすく、身体を楽器のようにしながら、全身で喜びを表現できることを目的にした。

３．ワークショップの学習環境のデザインと準備

本ワークショップは、①午前は大学ホールにおいてリズムを使ったからだほぐし、②午後は午前中に体験した基礎的なリズムをもとにグループでリズムをつくることを中心とし、「リズム」が全体のテーマとして位置づけられている。そのため、以下のような学習環境デザインおよび準備を行った。

■午前中

朝一番の活動で、からだがまだ凝り固まっている状況の中での活動であるため、からだほぐしの活動からスタートした。

①空間

音の響き、参加者同士が自然と顔を合わせられる広さを考慮し、大学内ミューズホールを選んだ。椅子や机は配置せず、床に直に座ったり寝転んだりできるようにした。

②活動

「リズム」でからだほぐしをテーマに基本的なリズムの中で、からだや声をつかえるようにした。

③人

学習者一人に対して一名の支援者がつき、ファシリテータや保護者、その他スタッフが楽しい雰囲気づくりを行えるようにした。

④道具

パーカッション（ボンゴ・カスタネット・トライアングル・鈴など）やピアニカなどを準備。好きな楽器を選べるようにした。

■午後

午前中の活動と昼休憩でかなりほぐれた「からだ」を使って、よりダイナミックな活動ができるような学習環境を検討した。それは「アートによって身体化される学び・身体化されたアートな学び」である。

①空間

活動場所を室内から屋外に移し、芝生と木々に囲まれた開放的な空間で「いつもとは違う、なにかが起こりそうなわくわく感」をテーマに空間をデザインした。参加者が期待感を持って活動に臨めるよう、まず造形的観点からポップカラーでペイントした金属製の四角形の廃材や段ボール箱を芝生に並べたり、積んだりした。さらに、グループの活動場所となる木とその周辺には金属製の管や、ステンレス製のパイプ、波板、漏斗、ミルク缶、空き缶などを吊したり、地面に配置した。造形的観点から並べたり吊したりしたこれらは、ばちでたたいたり、物どうしをぶつけることで音が出る素材や構造の物を使用し「造形的おもしろさ」と「音・リズム」の出会いを楽しめるようにした。

また、活動場所の中心には、手づくりの楽器（詳細は④道具で説明）や拍子木などを並べた「サウンドキッチン」を配置し、好きな音や形、大きさの楽器を参加者が自由に選べるようなブースを設けた。

②活動

本物の楽器を用いて音の多様性やリズムを体感し

た午前中の活動に引き続き、午後は日常生活の中で参加者自身もよく見かけるであろう物が楽器になる体験ができるようにした。本物の楽器と違って音や響き、構造的に「不安定」な楽器は、演奏に際して思いもよらない効果、例えば鳴らそうとしてうまくいかず意図しないところで間が生まれる、想像していた音と違う音色になるなど、結果として即興性を引き出すこととなった。活動は、

1 リズムツアー
2 リズムづくり（激しい 4 小節、静かな 4 小節）
3 グループごとに発表会
4 全体で合奏

③人

1 グループ：（1 学習者＋1 支援者）×５＋1 ファシリテータ＋美術サポーターもしくは音楽サポーター＝12〜13 人のコミュニティでリズムをつくる。

今回は、美術サポーターと音楽サポーターを各専攻の学生に依頼し、リズムを楽譜に図示する際、参加者にわかりやすいイラストや言葉で伝えるためのサポートとリズムづくりの音楽的サポートをしてもらった。

④道具

リズムツアーを楽しむために、各参加者に木製のばちを準備した。リズムや音を楽しめるように、扱いが困難な楽器は用意せず、振ったり叩いたりすることで音がなるものを制作した。1L・500ml ペットボトルおよびガチャガチャのケースに豆 5 種類もしくはビービー弾（プラスチック）を種類ごとに入れ、さらに手に持って使うだけではなく、身につけてからだ全体でならすことができるよう、口元に針金を巻き付けた。このほかに、マジックテープに鈴を縫い付けたもの、拍子木などを用意した。

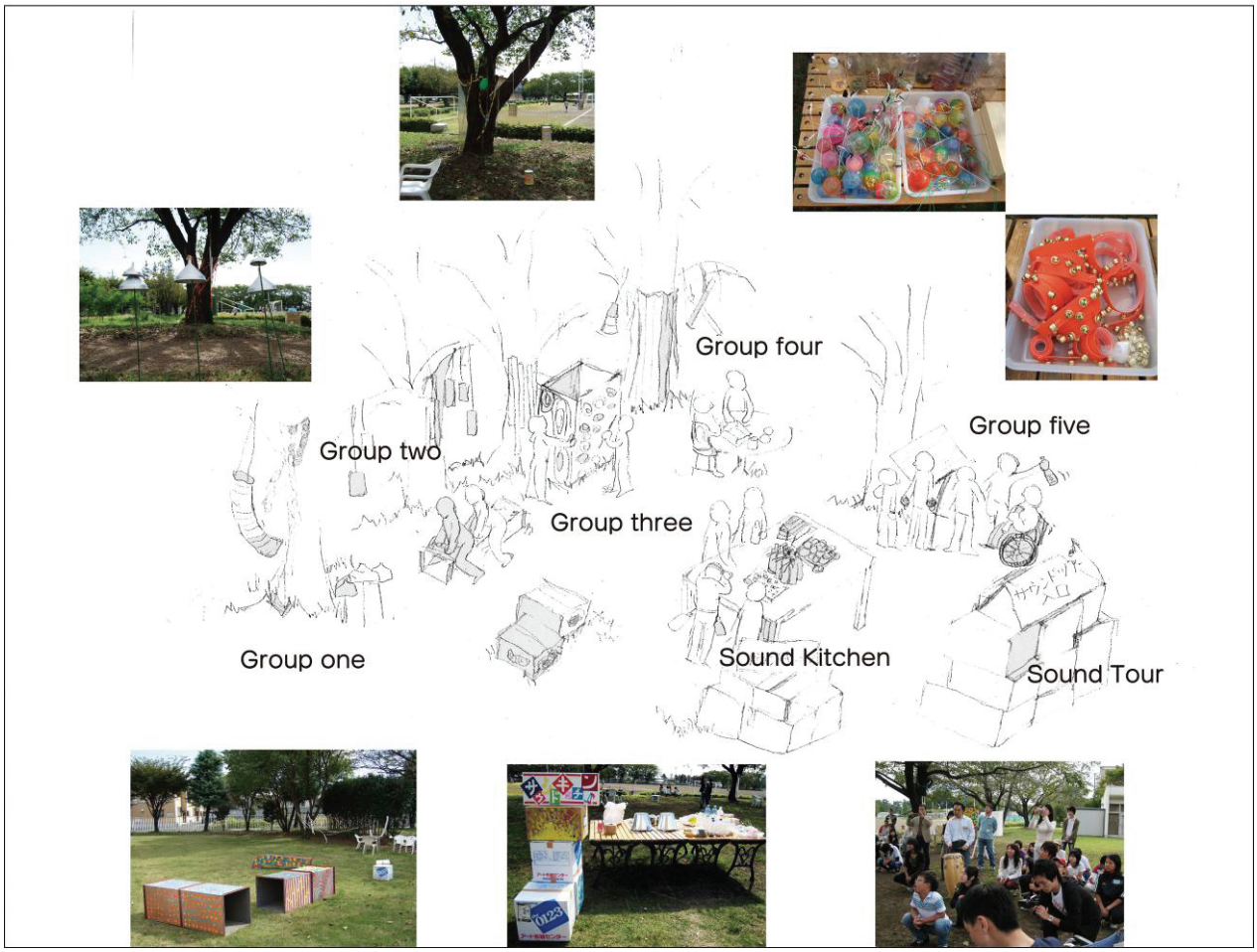

図１　ワークショップの空間デザイン（サウンドツアー）

4．ワークショップの実践

4・1　午前中の活動

時間	活動の概要	活動の様子
10:00	■セクション１ ○体でリズム体験 ◆大きな円をつくり、広がる。 ・参加者がスタッフと一緒に手をたたいてリズムをとる。 ・足でリズムをとる（パタパタパタ・パン） ・手２回ひざ１回のリズムをきざむ。 ・胸・頭のリズムをきざむ。 ・手・胸・手・頭のリズムをきざむ。 ・グループごとに変化をつけてリズムを回す。 ○口と体でリズム体験 ・「ブン！」というかけ声と体でリズムをきざむ。 ・参加者の様子を見ながら体の動きを変えていく。	※笑顔で楽しそうにリズムをとっている。 ※簡単なリズムなので、体を動かしやすく楽しみやすそう。 ※みんなで同じリズムをきざむので、一体感が生まれる。 ※きちんとリズムに合わせられている参加者が多い。
10:30 10:35	○休憩 ○口でリズムをきざむ ・「チッ！」と口でリズムをきざむ。 ・「ブン！」と「チッ！」を組み合わせたリズムをまわす。 ○叫び声を入れたリズム ・「ア～！」と、動物のような叫び声 ・「ブン！」と「チッ！」でパート分けし、全体でリズムをきざみ、最後にみんなで「ア～！」と叫ぶ。	●「まだ30分しかやってないよー！」 ※発声することで、会場全体が一気に活気づく。 「もっと大きな声で！」 ※笑顔が増える。 ※休み時間もスタッフと一緒に遊ぶ参加者が多い。 ※休憩中、楽器に興味をもって遊ぶ参加者もいる。 ※休み時間を挟んだことで、集中力が切れてきた参加者が少数見られる。 ※一同笑う。会場がこれまでの中で一番活気づく。 ※「チッ！」の発声は難しそうな様子。

10:45	■セクション２ ○好きな楽器を取りに行き、自由にたたいてみる ・自由に楽器をならす。 ○カウントに合わせて楽器をならす 「1、2、3、4。1、2、3、4　ワ～！！」 ○その場に座り、グループごとに楽器をならす ・８拍の中でリズムをきざむようにする。 ・自由にならす。 ・全体でリズムをきざむ（2回） ○ゆっくりとした 4×８拍を楽器や体、声を使ってきざむ ○スタッフが起立して、大きな動きをつくり、そこに楽器を組み合わせて合奏する	「すきな音の楽器を選んでね」 「たたき方を決めてね」 ※楽器があると会場がにぎやかになる。 ※楽器から出る音をシンプルに楽しんでいる様子。 ※からだでリズムを表現するよりも楽器を使う方が難しい様子。 ※からだを揺らしながら、全身でリズムをきざむ参加者も見られる。 ＜参加者の感想＞ ※恥ずかしがりながらも、インタビューに答える参加者たち。 「からだをつかったのがよかった」 「おもしろかった。楽器がよかった」 「たのしかった。楽器がおもしろかった」
11:20	○午前の活動終了	■午前の活動を終えて… 最初は緊張した様子だったが、だいぶリラックスした雰囲気に。

4・2　午後の活動

時間	活動の概要	活動の様子（F：ファシリテータ）
12:30	午後の部開始 ○サウンドツアーに出かけることを伝える ○参加者に一本ずつばちを配る ○グループごとに分かれ、自分のグループにある楽器をたたいてみる。 	※活動前からサウンドキッチンに集まって、楽器で遊んでいる。 ・ばちを受け取った人から、ボランティアと自由に庭の中に設置した物を自由にたたく。 ・それぞれに物をたたいて楽しんでいる。 →一人一本ずつのばちが有効 F:「こっちの音はどう？」 F:「こっちも音がするよ」
13:00	○サウンドキッチンに並べた楽器について説明。 ○グループごとにテーマを決め、激しい 4 小節と静かな 4 小節を木につるしてある物や、周辺に設置した物、サウンドキッチンにある楽器を使ってつくる。 	各グループの様子 **＜1 班＞** ●みんなで、からだ全体を使ってペットボトルを振る。 ●地面に置いてある金属の筒にガチャガチャを転がす。 ●ペットボトルを投げる。 ファシリテータが参加者の名前を呼んで、タイミングを計る。 **＜２班＞** F:「どんな曲がいいかな」 F:「小さな音、静かな音を探してみて」 ●ペットボトルをふらないで、静かに傾ける。 F:「静かな音がでるね」 F:「静かな音見つけられた？」 F:「みどりさんが見つけられるって」 ●金属のパイプをたたく。 高いきれいな音が出る。みんなで拍手する。 F:「おおー！いいね」 ●ペットボトルを持って静かに傾け、ゆらす。 F:「動きがあっていいね」 F:「みんながゆれて、Mさんがパイプを叩くのはどう？」 Mさん:「いいね」 F:「Mさん（の役割）は特別大事だね」 ●Mさん「えー」（恥ずかしそう） ●Nさんが段ボールを指でこする。 F:「Nさん、さっきこうやってた？」 ●みんなで段ボールをこする

	   	F:「段ボールをさわるのね。おとが出るね！」 ＜３班＞ 個々に好きなことをしており、なかなか曲ができない。 それぞれが好きなことをしたい。 ＜４班＞ ●Kさん：両手にばちを持って、テーブルの上に箱やバケツを使って組み立てたドラムを演奏する。 ●Hくん：豆の入ったペットボトルが気に入り、周りを走りながら両手で振る。 ●Zさん：金属のボックスを豆入りペットボトルでリズミカルに叩く。 ●Tくん：素材に惹かれている様子。鍋を作っている。そこにある素材同士を自由に組み合わせて音を探す。 ＜５班＞ 木のそばから離れて、音楽づくり。 ●楽器を自由につくりかえて、音を出している。 ex）豆と鈴をバケツに入れ、竹のばちでぐるぐるとかき回す。この様子から、 F：「これを２曲目の最初に入れてみようか」 ●音を出すことを楽しんでいる。 ●Eちゃん：そろばんを棒でこする F:「その音も入れてみようか」 F:「ジャッジャッジャジャジャって音をつくってみて」 F：「ジャンプしたら…（Cジャンプ）音が鳴るね！」
13:30 13:45 14:00 14:30	休憩 ○発表へ向けて準備をする。 ○グループごとに発表会。 発表グループの場所へ移動し、聴く。 ○全体で合奏する	各グループの様子 ＜1班＞ ・体の動きがおもしろい。 ・音の出し方（ガチャガチャを転がす、楽器を身につけて暴れる、段ボールを指でこするなど）が、工夫されている。 ＜２班＞ ・テーマ：「怒り」と「静か」 ・ゆっくりしたリズムに合わせて、激しく楽器をならす。 ・人の声も使う。 ・ファシリテータが誘導しながら演奏する。 ＜３班＞ ・ひとりひとりが、静かな音、激しい音をだす。 ・手の動かし方などを工夫して、音の違いを出す。 ・吊り下げてある缶を、最後に勢いよく打つ。 ＜４班＞ テーマ：「たいこのおすもう」「まぐろのおよぐ」 ・まぐろが泳ぐところをイメージした音を出す。 ・それぞれが見つけた、お気に入りの音でリズムをきざむ。

15:15	 ○アンコールで激しいバージョンを合奏。 ○終了	＜5班＞ テーマ：「ゆかいな工事中」「ジャンプ」 ・拍子木でリズムを取りながら演奏 ・木の葉の音も取り入れる ・最後に段ボールを勢いよく蹴り上げる

感想

■ 山本エマ（ひまわり会事務局）

今回の講座で特筆すべきは、本人とボランティアが1対1で活動することができたことです。5日の山西先生の講座の際のペアで、基本的には12日もペアを組んでいただきましたので、お互いの信頼関係がある程度構築できているところからのスタートができて、講座への導入は大変スムーズにいったように思います。

音楽と美術のコラボレーション講座は、関係者が事前に打ち合わせを2回、また事前の準備の段階でボランティアの方が講座関係者の方々と共同に作業したり、打ち合わせできたりしたことは、とても重要だったと思います。「もの」の準備はもちろんですが、「ひと」同士がお顔を合わせて、やり取りをしておくということの大切さを実感しました。

午前の部。ホールでの「音・声・動作のやりとりによる交流」。参加者の方々のそれぞれの反応が、予想以上に積極的でした。吉田先生が体中で「音」や「リズム」を表現してくださるので、参加者の方もわかりやすかったのだと思います。また、ボランティアの方をはじめサポートしてくださっていた方たちが自分たちも楽しみながら、また要所要所でご本人たちの動きをとらえて全体に返してくださっていたのも良かったと思います。

午後の部は、会場が移動になり、外での活動で皆さん活き活きとされていました。そこで「道具」の有用性を実感しました。

1日を通して、どの瞬間も新しい観点があり、山本自身には大変充実した講座でした。この公開講座が、今後も継続していくことができ、知的障害者の方々の高校卒業後の「学び」の場として、なんらかの発信の場となれればと思っております。

■ 鷺坂裕子

今回、私は主にドキュメント製作スタッフとして参加したが、本ワークショップは物理的にも内容的にも非常に規模の大きなものであったと感じる。ファシリテータやボランティアの人数も非常に多く、また参加した学生の専攻も障害児教育や音楽、美術など多岐にわたっていて、通常の美術科のみが主催するワークショップに比べ、ある種の特殊な活動環境となっていたのではないかと思う。

音楽と美術は本来大きく異なるものであるが、今回のワークショップの特に午後の部では、自然を仲立ちとして2つの領域が接近していく姿が見られ、両者のコラボレーションの可能性を改めて感じることができた。屋外の会場では、開放的な雰囲気の中、風や草木の匂いを感じながら活動することができ、参加者の生き生きとした表情も見られた。聴覚や視覚だけでなく、五感をフルに働かせることのできる環境が整っていたことで、参加者の積極的な活動が助長されたのではないかと思う。

またドキュメント製作を行っていて特に感じたことは、ファシリテータのコミュニケーションや具体的な支援が非常に巧みだったということである。今回の参加者は年齢も障害の程度も様々であり、個々に応じた丁寧な対応が必要であったと思うが、多くのファシリテータが参加者とうまくコミュニケーションを取り、楽しみながら活動を進めることができていたと感じる。スタッフである学生がそれぞれの専門性を生かし、ワークショップをより充実したものとしていたのではないだろうか。

今回のワークショップでは音楽と美術、障害を持つ

方々と学生スタッフなど、様々な要素が有機的な結びつきを見せていたと思う。今回の活動を通して、改めてワークショップという学びのかたちのさらなる可能性を感じることができ、大変有意義だったと感じている。

■ 井上昌樹

私は事前の準備段階から運営に関わり、そして当日はビデオ撮影係にまわり、比較的客観的な視点で今回のワークショップを眺めることができた。

今回のワークショップでは、事前の打ち合わせの段階で、ファシリテータ（ボランティア）と講師、コーディネーターとの間で意見交換をする機会が少なかった（あるいは全くなかった）。そのためファシリテータ側に今回のワークショップのねらいが十分に伝わっていなかったようだ。しかも中にはワークショップには始めて参加するというボランティアもいたため、ワークショップ序盤では、参加者とファシリテータ（ボランティア）の表情やコミュニケーションの様子から、全体的に（参加者も含め）不安な雰囲気が漂っていたように感じ取れた。

だが、リズム遊びで体も温まってきた午前の部の終盤から午後の部にかけて、参加者とファシリテータ（ボランティア）、あるいは参加者と参加者との間でのコミュニケーションが活発になり、最終的には、ワークショップには欠かせない、全体的に楽しい雰囲気をつくれていたように感じられた。開放的な空間における体全体を動かしての解放的な表現が、参加者にとって特に楽しい活動であったようである。

結果的に見て、今回のワークショップは参加者にとって自由で楽しい活動を促せたように思える。参加者の実態を把握しきれていなかったところや、活動の展開の仕方など問題点も多々見られるが、参加者が「その場を楽しむ」という点においては十分に成功だったと言えるのではないだろうか。

■ 手塚千尋

今回、ワークショップデザイン（主に後半）を進めるにあたり、いかに参加者がいつもと違うわくわく感や特別感を感じて、本人にとっての充実感を伴わせた活動ができるかという点を常に意識していたように思う。そのため、最終的にひとつの「作品」としてグループ発表はしたが、そこに至るまでのプロセス、つまり参加者同士、参加者とボランティアスタッフ、ファシリテータ、さまざまなモノとの関わりの中で生まれるコミュニケーションを楽しめるような活動、環境、道具のデザインを試みた。

実践を終えてみて、今回のワークショップの大きなテーマ「リズム」に対し、美術の造形的・視覚的要素が少なからず双方の教科性にとらわれないパフォーマンスを引き出すために作用していたのではないかと考える。

■ 吉田秀文

午前の活動では、「からだの様々な部位を使ってリズム表現を楽しむ」ことを目的に、身体の様々な部位を工夫して音を出し、全身で音楽を捉えることを目指した。活動においてはコンガによる固定リズム（およそ４分音符＝60）を繰り返し刻むことで全体の統一感を与え、それに基づき活動を展開した。そこでは、手、足、肩、膝や、発する声の趣向によって多様な音楽表現の可能性が実現しうることを確認した。これを基調として午後の活動では、５人程度のグループに分かれ、４分の４拍子、４小節の作品を、各グループがイメージするところのやり方で自由に即興表現し、発表を通して互いの良さを認め合った。

今回の実践を通して得られた成果や課題として、以下各３点を指摘したい。

【成果】

①身体全体を使って音・音楽を捉え、表現することができた。

音や音楽は、耳を介在して聞くだけでなく、全身を通して感じ取るものと考える。身体の様々な動きを伴いながらリズム表現をすることは、恥じらいを払拭するだけでなく、音楽表現への集中力を高揚させることに繋がった。

②音楽の根幹をなすリズムを感じながら、音楽表現活動を展開することができた。

リズムを感じることは、生命の鼓動や躍動感を促すものであり、人間存在の根幹を意味する。音楽におけるリズムは、「音楽の３要素」の中でも最も原初的なものであり、音楽表現全体を支えるものである。また、音楽教育において表現と鑑賞は常に表裏一体のものとして捉えられ、表現する際にも人間は必ず何らかの方法で聴きながらこれを行うとされている。以上の事項から考えて、今回は大いに意味ある活動となったと言える。

③午後の発表では、参加者が互いに協力しあい個々の役割を果たすことができた。

グループで一つの表現を総括し、発表するためには個々の相互理解が必要不可欠である。今回は協力して意見交換が行われたり、皆が呼吸を一つにして合わせる行為が見られた。

【課題】

①個々のリズム感の伸張

今回の活動では、個々の活動の独自性よりも、ファシリテータやボランティアのやり方を模倣する場面が比較的多く見られた。各々がより積極的に取り組める方略を追究したい。

②イメージ表現の実現に向けて

個々のイメージをどのように音で表すか、その実現可能性に向けての方策が課題である。直感力を支える基盤である経験の蓄積をどのように育成し、充実できるか、検討したい。

③ファシリテータによるサポートの充実

参加者とファシリテータの密接な関係があって、活動はより意味あるものとなる。サポートの弾力化、適切化について更なる検討が必要である。

【全体的考察】

今回、参加者は終始リズムを意識して活動全体を展開することができた。とりわけ、午前から午後に向けてその程度が増大しており、これらのことから参加者は、イメージ表現の追究可能性を充分に秘め、且つ持ち合わせていることが改めて明らかになったと言える。できたことに対する賞賛を踏まえながら、美的追究の方向性を少なからず意識した表現活動を志向し、今後計画することが大切と考える。

６.まとめ

本ワークショップを実施して感じた最大のメリットは、教育学部の同じ系に属しながら普段はあまり接触がない音楽とのコラボレーションが実現したことである。表現を目的にした専門（教科）性を持つ２つの領域であるが、音楽は近くて遠い親戚というのが、美術を専門にしている者の日頃の印象である。この溝を埋めるには、理屈よりもまず、お互いが実際にふれ合い、協同できる可能性を体験してみることであろう。今回の場合には、音楽と美術の異領域の協同（コラボレーション）は結果だけ見れば大成功だったというのが結論である。しかし、準備の段階から、どのように実施するかという方法論を中心に議論をしていったので、この講座の真の目的は何か、2 つの専門性が協同した地平に何が起こるべきかという問題まで詰めることはできなかった。この辺が逆にデメリットであった。

具体的なメリットは、次のような成果などであった。音楽と美術の境界線がない（参加者の）表現を主体にしたワークショップを実践できた。つまり音楽とか美術とかいう（ジャンルを示す）表現ではなく、アートして成立する学びを目的にした実践が実現できたことは大きな成果であった。そのためには, 多少の歩み寄りも必要であった。吉田のリズム遊び（表現）から発する定型的なリズム（音楽）づくりを目指すやり方を茂木が（知的障害者に合わせて）ゆるく自由な表現を織り交ぜて、できる範囲で、個人やグループの身体性を表現に基幹に据えながら、パフォーマンスをしてもらいたいという希望と合致させていったというのが本ワークショップ実践の実際であった。午前中のリズム遊び（表現）はやや難しいパターンもあったが、午後の活動に活かされ、音や音楽を拒否するという参加者もいなかったのは、楽しさを優先した結果だったと思う。技能がないと作品や演奏になりにくい音楽と自由で型からはみ出していくことを求める美術による、2 つの芸術のコラボレーションはなかなか難しいがおもしろかった。共通する「リズム」や「身体性」を基盤にして、つまり形や色や音やリズムなどによって、「イメージ」をどのように広げるかという問題は、現代芸術教育の課題になると思う。本ワークショップは、そのような「イメージの学び」としての音楽と美術の協同的な学習課題を明らかにし実践できたことで、今後の芸術教育研究の方向性を示唆するものになったことを大いに感じさせた。

またデメリットでは、障害者（児）の個人差がかなりあり、協同的な学習あるいは協同的な表現として、１つのまとまりを付けることが困難だったことである。グループでの最終発表会は個人的なものにとどまって、学習課題をどのように個人が捉え、協同性のあるものに落とし込んでいくのかは障害という要因もあり、細かい詰めまでには至らなかった。しかし、これは１回かぎりのワークショップという活動では難しい側面でもある。参加者がもっと自由に活動し、音やビジュアルな情報を使って、楽しく表現するという課題は現在

のような音楽教育と美術教育という枠を取り払い、アートの学びを志向すれば十分解決可能な課題であり、魅力的なテーマであることを今回強く感じた。

（執筆の分担は、１が茂木、２が金澤・茂木、３が手塚・吉田、４．１が手塚・吉田、４．２が手塚、５が井上・鷺坂・手塚・吉田、６が茂木で、全体を茂木がまとめた）

注

1）國本真吾・谷垣静子・黒多淳太郎（2002）知的障害者を対象とした高等教育の実践「オープンカレッジ in 鳥取」の現状と課題　鳥取大学教育地域科学部教育実践総合センター研究年報　12、pp. 67－73

2）丸山啓史（2004）知的障害者ホームヘルプの発達支援機能に関する考察、東京大学大学院教育学研究科紀要、44、pp. 401－409

謝辞：本公開講座及びこの研究を支援していただいた三澤章子、中島美波、立石宣暁、町田一男、米山雅子、髙久のぞみ、後藤朋美の各氏、群馬大学教育学研究科の院生（仙田徹、吉田真弓）、群馬大学教育学部の障害児教育専攻・美術教育専攻・英語教育専攻の学生各位に感謝します。本研究は、平成20 年度群馬大学公開講座及びひまわり会の支援を受けて実施された。

（もぎ　かずし・よしだ　ひでふみ・かなざわ　たかゆき
てつか　ちひろ・いのうえ　まさき・わしさか　ゆうこ）